

竹陵書言

文字の結構や運筆によく馴れて、思うままに書けるように、十分練習しておくこと。スポーツでも舞踊でも、練習に練習をつんではじめてよい結果が得られますように、書もまた最初はお手本について十分こまかく研究し、部分部分の練習をして、それで十分記憶して、たとえ間違ってもよくできるというようになっていなければなりません。孔子の言われた「心の欲する所に従って矩^{のり}を踰^こえず」というようになっていなければなりません。

(丸山敏雄著『書道芸術』三十六(三十七頁))

十分練習する

何をするにも十分な練習が必要なのは言うまでもありません。練習不足や準備不足のまま本番を迎え、本意な結果に終わってしまったという苦い経験はないでしょうか。

書道の場合は、何度も何度も繰り返し練習して、結構(文字の組立て、すなわち形)、運筆(筆の運び方)によくなれることが大切です。

『秋津書道テキスト』や『秋津書道』誌の競書ページには「学習の手引き」がありますので、そこで「十分こまかく研究」してください。

芸術部の方は競書課題あるいは古典臨書研習で取り組む古典・名筆の特徴(「孟法師碑」は方形で隸書の

筆意がある等)を把握しておくことが、臨書においてはとても大切です。

中国の古典であれば、二玄社の「中国法書ガイド」がお勧めです。

お持ちの手本にも最初か最後の方に、その古典・名筆の説明書きがあるので、そこで概要、特徴をまず把握してください。

「それで十分記憶」できれば理想ですし、それくらい何度も書き込めば自信を持って筆を持てます。

「たとえ間違ってもよくできる」というのはユーモアのある、また含蓄のある言葉です。

孔子のように、自分の思うままに行っても、正道から外れないように、書道を通じてもなっていきましょう。